農村片言

法律の逆用に就て

無産階級の運動に同情もしくは理解をもつた辯護士諸君の中に、よく『法律の逆用』を力説する人がある。それ等の人に云はせると『法律の逆用は、法律が民衆の總ての意志であると云ふ定義の下に民衆をゴマカさうとした點を利用するのにあり、彼等のワナに彼等を陥れる所に妙味がある。』と云ふ。

これは一寸聞くと甚だ妙案であり痛快に思はれる。しかし[illegible]。要するに一種の『妙味』に過ぎない。小刀細工だ。そしてこの小刀細工を考へてゐる事は、既に社會運動をも、小刀細工の社會運動に終らせて了ふ結果になるんだ。

法律を逆用しようがために少々法律を知つてゐたりなどすると、そいつが邪魔になつて反つて運動の熱情をやはらげる結果になる。ケチな『妙味』や小刀細工は、俺達の運動の勘定玉に入れない事だ。たゞ向ふ見ずにやる事だ。

小作人の政治運動

この頃、小作人組合の間に政治運動の必要を説いて『今年の秋には縣會議員の選擧が行はれ、來年の春には衆議員の選擧がある筈だ。之れに對して農村無産階級には充分なる準備があるだらうか』と云ひ、全力を擧げて選擧戰に望まなくてはならぬ事を主張する連中がある。

しかし諸君、これは俺達が度々云ふ事だが、村會、乃至は縣會又は議會で、俺達小作人が大多數の議席を占める事が出來たとしてもだ、それが何になると云ふのだ。本當に議會で大多數を占められる丈けの勢力が小作人にあるなら議會で法律を作らなくても、議會で承認されなくても、小作人の力は直ちに發揮され得る筈だ。別にまはりくどい事をする必要は少しもない。

議會は人間を獸化するものに過ぎない。俺達は野心家共の腹黒い口車に乘つて奴等の餌食になる馬鹿は止さう。

俺達の運動を突き進めて行くものは俺達自身である。俺達の力のみである。餘けいなものに手を出す前に、餘けいなものをたゝき壊すんだ。

政治の正體に就いて詳しく知りたい人は『俺達と政治』を讀んで下さい。農村運動同盟で取次ぐ。十部二十錢。

副業奬勵に就いて

農家の苦しい暮しを緩和するために副業を奬勵する。今更ら奬勵されなくても、大概の農村はそれぞれ副業を持つてゐる。養蠶などはその重なものだ。

然し奴等が副業を奬勵するのは誰の眼から小作人を思つてではない。地主共は米を俺達からウンと占めたおまけに副業の上前を刎ねやうと云ふのだ。或はこの副業の餌によつて小作米減額の鉾をさけやうとしてゐるのだ。人間と云ふ奴は妙なもので、今までの苦しい生活がホンの少しでも緩むと大變樂になつたやうに思ふものだ。副業をもつと一生懸命やればも少し樂になるだらうといふ助平根性を出すものだ。奴等はそのコツを呑み込んで俺達から一層うまい汁を吸はうとしてゐるんだ。

俺達は副業なぞせなくても隨分からだを粉にして働かされてゐる。この上副業なぞでいためつけられて堪り切れたものでない。俺達は副業で暮しを助けやうとするやうなゴマカシはやめて、本當に暮しを樂にしようと思ふなら納米を減らす運動をする事だ。橫どりをなくする運動をする事だ。そして忙しいからだに少しは餘裕をつけて教養の時間を得る事だ。

二人の戰士の死

街頭に倒れた高尾君

[illegible]、何時でも何處にでも、我等と行動をともにつけてゆく闘士であつた高尾平兵衛君は、六月二十六日早朝、[illegible]赤化防止團本部に押しかけ、團長米村嘉一郎君をとつちめた上謝罪させたが、其歸途を米村が後方から狙撃する拳銃彈に後頭部を撃たれて街頭に仆れた。今年三十五。革命戰の犧牲となつた同君の告別式は、社會葬の名によりて、七月八日青山齋場に於て盛大に行はれた。

病床に斃死した竹内君

六月二十四日午前二時、同志竹内一郎君は二年有餘の病床生活に再び革命戰に立ち得ぬを嘆じつゝ無念の息を引き取つた。行年三十。

大正十年の[illegible]事件で高尾君等と相並んで奮闘した同君の靈は、今日も我々の闘士にまざまざと浮ぶ。